

はじめに

はじめまして。

この本を手にとつてくださったあなたは今、人生のどんなステージに立っていらつしやるのでしょうか。

「わたしは小学生のときに『逢いたい時にあなたはいない…』というドラマの中山美穂さんに憧れ」「看護師になりたい!」とふいに思いたち、専門学校を経て、念願の看護師になりました。独身時代は、仕事もプライベートもますます充実し、楽しく過ごしてきました。

そして結婚し、3人の子どものママをしています。現在は復職し、子どもがいない日中を中心にパートの形で働いています。

基本的には、数多くいる主婦の一人です。最初は新鮮だった主婦業にも慣れ、手抜きもできるようになった、主婦の中堅といったところでしょうか。どんどん成長していく子どもたちは、かわいいだけではなかなか済まされず、日々鬼婆の形相で怒り、それを横目に見て見ぬふりをする夫にイライラしたりと……。

楽しく過ごしていたあのころとは打って変わり、家族中心の毎日があつという間に過ぎていく、そんな日常を過ごしています。

「まだ寝たい……」そんな自分に渴を入れ、起床します。わたしの家事はまず、洗濯からです。その間にお弁当を作り、夫や子どもを起こします。わが家の長女、朝は決まつてご機嫌斜めです。次は長男、これもまたなかなか起きないので、朝一発目の鬼婆の形相になります。次女は3人目ということもあり、わたしにとっては孫感覚なところがあります。彼女のなんともいえない無防備な寝顔に「ママもいいもんだな♡」と癒やされたりもします。

夫はザ・昭和男なので、新聞、朝ごはん、着ていくものの準備、これすべてそろつていないと機嫌が悪くなります。そんな夫に最初はいろいろと思うこともありましたが、慣れとは怖いもので、今となつてはルーチン化したそれらの用意を、何も考えずこなせてしまうものです。

並行して自分の準備をします。ゴミの日、小学校の旗当番の日、曜日によつて朝の仕事量も増えます。勤めている職場までは、自転車で10分もあれば着きます。行つたらすぐ白衣に着替えるため、独身のときのように、念入りに準備をすることはなくなりました。そこそこの化粧でいいのです(笑)。

そして、休日は家族で出かけたり、ママ友や職場の同僚とランチや飲みに出かけたりと、それなりに過ごし、それなりに楽しい、そんな生活を送ってきたのです。

でもあるときから、ふと大晦日になると思うことがあったのです。

「本当にこのままでいいの？」

今の人生が、嫌で嫌でたまらないわけではありません。でも、何か物足りないような、どこか我慢しているような、そんな感覚が湧いてきたのです。

現実生きる自分は、今で満足だと思おうとするのですが、心の奥底にいるもう一人の自分は「本当にこの人生でいいの？」「もつと何かやりたいことがあるんじゃないの？」「何かできるんじゃないの？」ともがきだしていたのです。

永遠に続く家事。夫の機嫌をとらないといけない自分の立場。子どもを育てていかないといけない責任。おしゃれもしないでさびついた自転車をこいでいる姿がふとガラス越しに映った瞬間。仕事に行けば愚痴ばかりの環境。SNSを見ては羨んでいる自分。

そのすべてを見て見ぬふりをして、自分をごまかしつつけることが嫌になったのです。

だからわたし、ここから出ることに決めたのです。

そしてわたしは今、自分のためだけに、自分のやってみたいと思つたことをやっています。そこらへんにいる主婦が、パソコンに向かい、執筆活動をしているのです。顔も知らないあなたに本を届けてみたいと思つているのです。人生つて、一步踏みだせさえすれば、今まで知らなかつた世界へだつて行くことができるのです。

冒頭で、今あなたがどんな人生のステージにいるのかをうかがいました。

今現在の自分は幸せなのか、不幸せなのか。このままでいいと思つているのか、そうでないのか。自分自身つてどんな考え方をする人間なのか。改めて考えたこと、最近ありますか？

夫や子どもがいると、自分自身のことが一番後回しになりがちです。わたし自身もその一人でした。でも自分と向き合う作業をしない限り、自分が本当はどうしたいのかは、わからないままなのです。本当は嫌だと思つていることすら、もうわからなくなつてしまつています。

この本は、そんな毎日の中で、少しでも自分自身と向き合う時間を作り、心の奥底にいる自分、その自分が本当はどうしたいと思つているのか、どうしていききたいと思つているのか、あなたと一緒に考えていけたらと思ひ、書き進めています。

わたし自身も、やりたいことに向かつて突つ走つている真つ最中です。完璧でもない、完成形でもな

い、悩みも迷いも不安も、まだまだありまくりです（笑）。だからこそ一緒に考えたいのです。そしてあなたがこの本を読み終えたあと、わたしはこの本を書き終えたあと、ともに人生のステージが一段階ステップアップできていることを願いながら、筆を進めてみることにします。